

御堂ヶ池 2号墳は「消滅」したのか

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



工事掘削面に現れた石積みの実測

石積みの発見

洛中を離れ嵐山へ続く新九太町通が嵯峨野にさしかかるところ、北に向かい山を越えて周山街道へと抜ける一本の道(梅ヶ畑山越線)がある。1992年6月、この道の峠付近(右京区梅ヶ畑向ノ地町)の下水道工事ともなう立会調査で、地表下0.7～2.1mの位置で積み上げられた数個の石を発見した。

さらに石の周囲の断面をよく観察すると、工事掘削面北壁には径40～60cm大の石がきれいに6段積み重ねられていたことがわかった(復元図-A)。南壁では石積みの一部崩れてはいるが20数個の石が現われた(復元図-B)。石群は

発見された場所から西へ広がりを見せていたが、残念ながら工事の土止めの鋼板にさえぎられて全体を観察することはできなかった。

その場で工事を一時中断してもらい、さらに壁面や石をきれいにし、土層観察・実測・写真撮影などの記録作業の後に遺物の採集を行ない、最後に石積みの位置を記録した。そして数分後には工事業者の重機によって埋め戻され、再び地中へとその姿を消した。

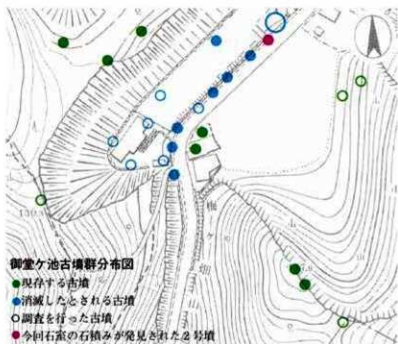
今回の石積みの出現した地点は、御堂ヶ池古墳群に位置しており2号墳の位置にあたるということがわかった。しかし、2号墳はすでに道路敷設によって「消滅」したこと

になっていた。

嵯峨野地域の古墳群

この嵯峨野地域に古墳が築造されるのは6世紀に入ってからのことであるが、この時期に突如として造り出された古墳は、その後7世紀前半までの間に200基近くが築造されている。その中には、全長75mを測る大きな前方後円墳から、直径10mにも満たない小さな円墳までが含まれているが、それら大小の古墳は、立地・形態・規模などからみて大きく3つのグループに分けられる。

第1のグループは嵯峨野東南部の平地に築かれた前方後円墳からなるもの。第2のグループは台地



上に点在する中規模の円墳からなるもの。第3のグループは北方の丘陵地に群在する直径10m前後の小円墳から構成されている。

これらの古墳は、5世紀後半に朝鮮半島から移住し、嵯峨野地域を開発した秦氏一族のものと考えられている。御堂ヶ池古墳群はこの第3のグループに含まれる。

御堂ヶ池古墳群

御堂ヶ池古墳群は、嵯峨野の北東、山越北方の谷間にあった御堂ヶ池と呼ばれる小さな池の兩岸に営まれたもので、西側の丘陵尾根

上に4基、丘陵斜面上に17基、東側の丘陵裾部に2基、丘陵尾根上に3基、総数26基からなる古墳群である（分布図参照）。

1960年代の高度成長の開発の中で、このあたり一帯も宅地造成と道路敷設が行なわれることになり、工事の強行によって一部の古墳が未調査のまま破壊された。さらに残った古墳もまもなく同じ運命をたどることになったため、1964年から本格的な発掘調査が開始された。しかし、未調査のままでは工事が進められるところがあり、現在

まで総計11基が発掘調査されているにすぎない。調査と工事の混乱のなかで2号墳は「消滅」と記載された。

現われた2号墳

出土した石積みは、分布図にあてはめて見ると2号墳の墳丘のほぼ中心部に位置し、横穴式石室の東壁の一部分であることがわかった。その後、石室西壁の推定地の工事掘削に立会ったところ、予想どおり南北方向に並ぶ石列が現われた（復元図-C）。しかし残念なことに、工事の掘削部分が石室の内側ではなかったことから石室の幅は確認できなかった。

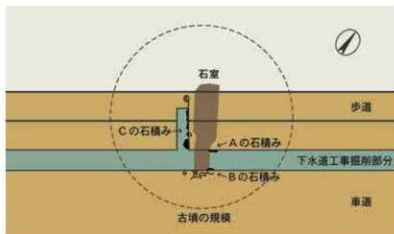
すでに「消滅」とされていた御堂ヶ池2号墳は、道路敷設のために破壊されたのではなく、実は道路の下に埋もれていただけだったのである。2号墳は、いまその姿を垣間みせた。そのわずかの間に知り得た情報は多くはない。しかし、「消滅」とされていた古墳が残っていたことを確認できたことは大きな成果であった。

御堂ヶ池2号墳は、多くの謎を秘めたまま再び姿を隠した。

（小繪山一良）



工事掘削面北壁の石積み（復元図-A）



御堂ヶ池2号墳の推定復元図